

第3章 海の汽水域—汽水文化研究の拡大を目指して—

松田 睦彦
(国立歴史民俗博物館)

はじめに

小稿は、これまで河川感潮域に限られる傾向にあった汽水域における生活文化の研究を、海の側へと拡大することを旨とするものである。

従来の研究で私たちが汽水域という言葉を用いる場合、その対象は、河川感潮域、つまり河口を起点として、上げ潮によって海水が河川をさかのぼり、淡水と交わる地点まで、とするのが一般的だろう⁽¹⁾。こうした水域ではマハゼやアカメ、スズキ、ボラ、クロダイといった汽水の環境を好む海水魚やテナガエビなどの甲殻類が生息し、ウナギ、サケ、アユのように、一生の間に淡水と海水を往復する魚の通過点ともなることが知られている。また、淡水魚が泳ぐ姿も見ることができる。汽水域におけるこうした魚介類を対象とした漁についての研究は、これまでもおこなわれてきた。

一方、汽水域を本来の意味のとおり、淡水と海水が混じりあう水域ととらえれば、その対象は河口よりも海側の水域へと広がりを見せるはずである。当然のことながら、河川の水は海にむかって流れつづけている。河口を境として、上げ潮とは逆の方向に向かう淡水が、常に存在するということであり、この淡水が塩分濃度の低下をもたらして汽水域を作り出すのである⁽²⁾。こうした海側の汽水域では、河川側とは異なる生物相が見られる一方で、河川感潮域と共通するものを確認することもできる。すなわち、汽水域とは河川感潮域で完結したのではなく、海の側へも広がりを持つ一体の水域なのである。

しかし、管見の限りでは、これまでの民俗、あるいは生活文化の研究において、河口部の海側の水域が汽水域として取り上げられたことは少なく、漁などの生活文化におよぼす淡水の影響が考察されたことは、ノリ養殖の研究を除けばほとんどない⁽⁴⁾。その原因は、これらの水域が干潟や海という環境に位置づけられ、そこでの生活文化の研究をも囲いこんできたことにあると考えられる。その背景には、河口から海水がさかのぼる距離、すなわち汽水となる範囲を視認することができる河川感潮域に対して、海の側は汽水の範囲が明確ではないこと、さらに、海水魚が川を泳ぐ光景に象徴されるような、汽水であることを示す現象が一般には目撃されにくいことなどがあげられるのではないだろうか。

しかし、海に淡水が流れこんでいる以上、そこに汽水の環境が存在し、その環境に適合的な生物相が形成されていることは明白である。また、それを利用した人びとの生活も、汽水の影響を受けた、独特の海の利用のあり方を培ってきたことが予想される。

ただ、これまでの研究では、海を舞台とする生活がいかに淡水の影響を受けたものであるのか、また、漁にたずさわる人びとが、淡水の影響をどのように認識してきたのか、など、海と淡水との関わり、つまり海の側の汽水的性格に注意が払われることは少なかった。民俗学における汽水文化研究は、生活にあらわれる人と汽水域との関係を解きほぐす必要があるが、その基礎的な作業として、海の側における汽水的性格を明らかにしておくことは重要であろう。

そこで、小稿では、千葉県市原市青柳の元漁師の語りから、昭和36年(1961)までおこなわれていた漁の

様相を整理し、海における淡水の影響とそれに対する漁師の認識について考えることで、青柳の海の汽水的な性格を浮きぼりにし、汽水文化研究の海の側への拡大のための地ならしをしたい。

1. 調査の概要と前提

千葉県市原市青柳は市の北西部、養老川下流域の左岸側に位置している。地区の中央部を養老川の分流である前川が流れており、北は松ヶ島地区と、南は今津朝山地区と接している。また、青柳地区の西部は東京湾に面しており、漁業権のおよぶ地先は、松ヶ島と今津朝山との間、およそ2.5キロメートルを範囲とした。

青柳の基幹産業は、明治33年(1900)からはじまったノリ養殖であり、200軒以上がノリ養殖にたずさわっていた。また、ノリ養殖の繁忙期以外には、地先の漁場を利用したさまざまな漁業がいとなまれており、とくに、バカガイの産地として知られていた。正徳年間(1711-1716)にバカガイが大量発生し、それを江戸で売りさばいたのがバカガイ漁のはじまりだとされ、食用に加工されたバカガイの身を指す「青柳」という名称は、地名に由来するという。

農業は水田稲作が中心である。水田の面積は5反から6反というのが一般的であり、地主でも1町程度だったという。海の仕事と兼業する家が多く、「半農半漁」だと称される。

昭和26年(1951)に「千葉県総合開発計画書」が策定されると、市原市はその中核をになうこととなる。京葉臨海工業地帯造成のための沿岸部の埋め立てが決定し、青柳地区も昭和36年(1961)に県と漁業協定を締結し、漁業権を手放している。その後、埋め立て工事が進められ、造成された土地は沖合2キロメートルの地点にまでおよんだ。ここでは現在、JXTG エネルギー(石油製品)や東レ(化学製品)、JSR(化学製品)といった企業の大規模な工場が稼働している。

さて、小稿の執筆にあたってお話をうかがったのは、青柳地区在住の小倉三雄氏(昭和7年生まれ、85歳)および小倉澄夫氏(昭和21年生まれ、70歳)のお二人である⁽⁵⁾。とくに小倉三雄氏は、昭和36年以前に、みずからも漁業にたずさわった経験を有しており、小稿で紹介する事例の多くは、三雄氏のご教示くださったことにもとづいている。したがって、小稿が対象とする時代は、三雄氏の幼少期の昭和10年代から、青柳地区が漁業権を手放す昭和36年までということになる。

小倉三雄氏は小倉家の三男に生まれた。したがって、中学校を卒業して働きはじめた当初は漁業権を有しておらず、ノリ養殖やハマグリ採取など、漁業権を必要とする漁業に主体的に関与することはできなかった。しかし、それでも「海は本気でやっていた」という。ノリ養殖を中心とした親の漁業を手伝う、青柳以外の土地で入漁料を払ってノリ養殖をおこなう、漁業権の必要ない漁にたずさわる、いったかたちで、三雄氏は海とかかわって生活していた。

昭和36年に漁業権を手ばなすまでの三雄氏のおもな仕事は農業とノリ養殖であった。農業は稲作が中心で、水田の面積は買った土地と借りた土地を合わせて7反ほどであったが、収入のほとんどを漁業、とくにノリ養殖から得ていた。

ただし、三雄氏は三男であり「柵を分けてもらう」ことができなかった。したがって、中学校卒業当初は親のノリ養殖を手伝いながら生活し、のちには、他地域で権利を買ってノリ養殖をおこなうようになる。耳を疑うような話であるが、昭和20年代から30年代にかけて、三雄氏は検見川、幕張、谷津、船橋といった千葉県内から、江戸前、すなわち江東区や大田区にまで行ってノリ養殖をおこなっていたというのである。それも、船やオート三輪で毎日通い、その日のうちに帰ってきて、家でノリ漉きと乾燥までしていた。当時、これらの



千葉県市原市青柳の位置

海では、ノリ養殖の権利を一年単位で買うことができたのである。

なお、三雄氏は昭和32年（1957）ころに青柳で漁業権を手に入れ、昭和36年までの三年ほどの間、地元の海でノリ養殖をおこなっている。

さて、かつてのノリ養殖は8月に入ると杭を立て、9月には種付けのために網を張った。11月から3月まで収穫をおこない、4月に後片づけをしてすべての作業を終える。水田での作業はこれと並行しておこなわれ、とくに刈り入れの時期は繁忙をきわめた。また、ノリ養殖の作業のない5月から7月は、海苔干しに使う葦簀を編む作業や網を作る作業をしていたという。

こうした仕事の合間をぬって、セエモン（菜もの）、つまりおかずとりの漁がおこなわれ、それが小遣い稼ぎともなった。その代表がバカガイやハマグリ採取であった。これらの漁をするには、正式には漁業権が必要であったが、地元の間人であるということで、ある程度のことを見逃してもらえたという。

小稿では、こうした、三雄氏が経験した、あるいは見聞きしたセエモンとりの漁を題材に、青柳の海の汽水的性格をあぶり出してみたい。

2. 汽水域としての「洲」と青柳の海

小稿がフィールドとして取り上げるのは東京湾である。東京湾は浦賀水道によって南を太平洋と区切られた湾である。もっとも狭い富津岬（千葉県）と観音崎（神奈川県）とを結ぶ線より北を内湾と呼ぶ。内湾は南北におよそ50キロメートル、東西におよそ20キロメートルあり、面積はおよそ1,200平方メートルである。水深は50メートルよりも浅く、湾の中央部には水深10メートルから40メートルの平地が広がっている。この底質は泥（シルトおよび粘土）である。一方、岸の近くには水深5メートルよりも浅い平坦面が続いており、底質は砂である。東京湾の漁業者は、潮の満ち引きによって冠水と干出を繰り返す潮間帯である干潟と、この水深5メートルよりも浅い砂質の平坦地を合わせて「洲（す）」と呼び、水深が深く泥質の「平場（ひらば）」と区別してきたという〔貝塚1993：1-5〕。小稿でとくに取りあげたいのは、「洲」の方である。

埋め立てが進んだ現在、葛西沖の「三枚洲」や小櫃川河口地先の「盤洲」、富津岬地先の「富津洲」などに限られているが、かつて洲は、東京湾に広く形成され、沿岸で暮らす人びとにとっての重要な漁場であった。文化13年（1816）に定められた「江戸内湾漁獵三十八職」とは、東京湾（江戸湾）で許可された38の漁法のことであるが、このなかには洲でおこなわれる漁法が多く含まれている。現在では、平場における底曳網や釣りなどの漁がさかんにおこなわれているが、埋め立て以前の東京湾では、だれもが特別な装備を持たずに漁をすることができる洲を漁場として利用することが一般的であった。青柳の海も同様である。

前節でもふれたように、青柳は西を東京湾に面しており、松ヶ島と今津朝山との間、およそ2.5キロメートルの範囲を漁場とする。

青柳の海は沖に向かって2キロメートルほど洲、すなわち遠浅の海が続いており、その岸寄りには干潟となっていた。洲の水深は、最も深いところでも4尋（6メートル）程度であったという。しかし、洲の先端からは急に深くなり、8尋から13尋、つまり、12メートルから20メートルほどにまで海底が落ち込む。船の上から海底が見とおせる状態から、突然真っ青な深い海にかわるのだという。この、海底が急に落ち込む場所は、上側がダンギワ、下側がデーナミと呼ばれている。上で、東京湾の海底地形が、湾の中央部に水深10メートルから40メートルの平地が広がり、岸の近くには水深5メートルよりも浅い洲が続くことを紹介したが、青柳の海もその例にもれないということである。

また、底質について三雄氏は、深いデーナミから沖は「ヘドロ」であり、ダンギワより浅いところは「きれいな砂」であったと語る。これも、科学的な調査の結果と合致している。こうした底質の状況は、青柳から20キロメートルほど南西にある、木更津市の小櫃川河口域でも確認することができる。すなわち、水深5メートル以浅の潮下帯の底質は中央粒径値0.2から0.3ミリメートルの中粒砂からなり、水深5メートル以深は、水深を増すにつれて泥質となるのである〔大島・風呂田1980：p.50〕。

東京湾がこうした底質となる理由については、地形学、地質学的な根拠が示される必要があるが、青柳に限れば、三雄氏や澄夫氏は、前川河口から3キロメートルほど北西にそそぐ養老川の水と、東京湾の潮流の影響を指摘する。ごく大まかに説明すると、砂泥を含む養老川の水が、東京湾の潮流の影響で青柳の方に流される。その過程で、粒子が荒く重い砂が青柳の沖で沈んで洲となり、粒子が細かく軽い泥はそのまま流されて、さらに沖の平場に堆積する、というのである。

こうした地元の人々の知識は、生活をかけて海と接してきただけに、信頼に足るものと考えられることができる。たとえば、東京湾の水の流れる方向についてはさまざまな要素が複雑に影響しあっており、場所や時間、季節、水深などによって様ではない。したがって、養老川河口域や青柳沖の水の流れを一概に決めることはできない。それでも、大まかな傾向を示すならば、潮汐にともなう潮流は、上げ潮、下げ潮ともに養老川河口域から青柳方面への流れとなっている。それに対して、非周期的な流れである恒流については、季節ごとの卓越風の影響で、冬季は上層、下層ともに時計まわりの環流が認められ、夏季は上層、下層ともに反時計まわりの環流が認められるという。ただし、夏季の上層については、風のない条件では時計まわりの環流が認められる。これは、密度流、すなわち、塩分濃度を調整しようとする水の動きの影響だと考えられる。つまり、夏季には河川からの淡水の流入が増え、海水との均衡を図ろうとする流れが、東京湾では時計まわりだということであり〔貝塚1993：pp.147-150,157-172〕、青柳では養老川から青柳方面を向いて水が流れることになる。

もちろん、こうした情報のみをもとに、養老川河口域から青柳沖にかけての水の流れと、その結果としての底質を語ることはできないが、一定の蓋然性を認めることはできるだろう。そして、興味深いのは、青柳の漁場としての洲が、養老川から流れ出る水の影響を受けているということである。これは、あくまでも底質を構成する砂の運搬の問題であり、直接的に汽水という問題とは関わらないかもしれないが、川から流れ出る淡水が生活の場としての海に与える影響という意味では、注意すべき点であろう。

3. 漁の記憶

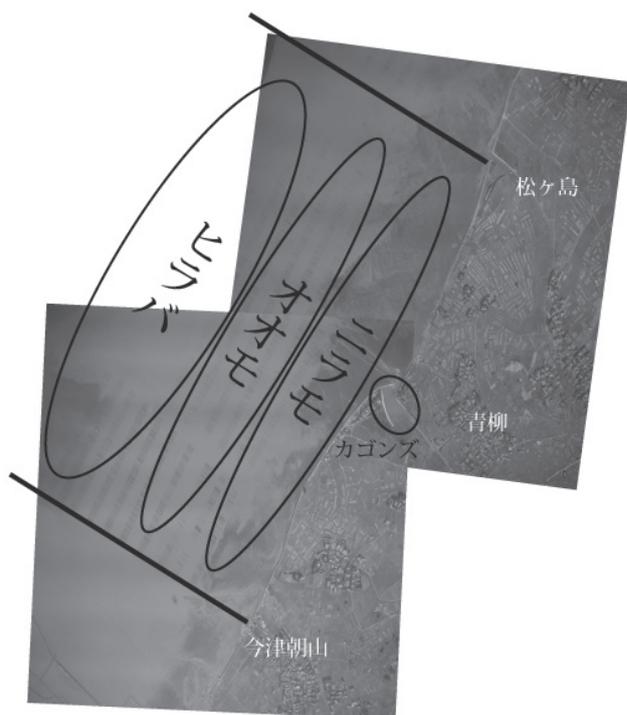
さて、青柳の人びとの多くが漁場とするのは砂によって形成された洲である。埋め立て以前の地図で確認すると、洲は岸寄りの1.5キロメートルほどが干潟となっているが、三雄氏の話によると、実際には700メートルほどだと考えられる⁽⁶⁾。

もちろん、デーナミから先の平場も漁場として利用された。たとえば、スミイカ（コウイカ）は平場で籠を使ってとられた。この籠は、細く割った竹でかまぼこ型の骨組みを作り、そこに網をはったもので、なかに笹を入れていくつも沈めておく。すると、産卵にきたスミイカがその籠に入るという仕掛けである。また、アカエイの延縄もおこなわれていた。150本のカラバリ（餌をつけない鉤）をつけた仕掛けを15本ほど、稲毛浅間神社の沖から富士山へ向かって流したという。とれたアカエイは、煮こごりの材料として船橋や地元青柳の魚屋に卸していた。

ただし、こうした漁はだれもおこなっていたものではなく、限られた人によるものであった。水深の深い

平場での漁には専門の漁具や動力付きの船が必要であり、洲にくらべて事故の危険性も高かったからであろう。たとえば、アカエイ漁には10馬力の焼玉エンジンを搭載した船が使われていたといい、他の地域の人びとがおこなっていたトリガイやアカガイの漁は、打瀬船を使ったものであった。

さて、三雄氏にうかがったお話を整理すると、青柳の漁場の環境は、カゴンズ、ニラモ、オオモ、ヒラバ⁽⁷⁾の4つに分けて認識されていたと考えることができる⁽⁸⁾。ここでは、それぞれの環境と、そこでおこなわれていた漁を確認し⁽⁹⁾、その汽水的生活についても考察する。



青柳の漁場

① カゴンズ

青柳地区を東南から北西に貫き、埋め立て地に沿って走る運河をとって東京湾にそそぐ前川は、水田の排水と養老川からの導水を水源とする川である。二級河川である前川およそ1.5キロメートルと、準用河川である上前川およそ3.1キロメートルをあわせた総延長は4.6キロメートルになる。河口は、もっとも広いところで100メートルほどの幅を有しているが、運河と接続する部分ではふたたび80～90メートルほどに狭くなっている。これは、河口部左岸の土地が張り出していることに由来する地形である。この張り出した土地は、もともと前川が運んできた砂が堆積した洲で、カゴンズ、あるいはカゴンズの鼻と呼ばれる⁽¹⁰⁾。地形的に海側とは画されたこのカゴンズの内側が、塩分濃度のうすい汽水の環境となっている。



現在のカゴンズ

カゴズ周辺にはボラの幼魚のイナやクロダイの幼魚であるチンチンカイズ、ハゼなどがおり、シラタエビも多かった。また、ニラモのなかにはモクズガニも生息していた。しかし、これらは漁獲の対象にはほとんどならず、子供がチンチンカイズを釣ったり、笹の葉を入れたざるを沈めてシラタエビをとったりする程度であったという。

商売となる漁はウナギとり程度であった。

〈ウナギ〉

カゴズの周辺では、孟宗竹を1メートルほどの長さに切り、節を抜いてニラモが生えるなかにひと晩沈めてウナギをとった。竹は潮に流されないように割った竹で底に固定する。これをポッポまたはツツポ、タケツツポと呼んでいた。漁期は4月から10月である。

② ニラモ

ニラモ（コアマモ）は湾奥や河口などの、干潮時には干上がるような浅い海底の砂泥に生える多年草であり、葉は長さ10センチメートルから40センチメートル、幅1.5ミリメートルから2ミリメートルほどに成長する。汽水域を好む海草であるニラモは、青柳では前川の河口、カゴズ付近を中心に繁茂していた。ニラモの生息域は岸から500メートルから600メートルほど沖までであり、河口の北、松ヶ島方面よりも南の今津朝山方面が多かったという。自生地が干潟であるため、ニラモは干潮時には砂地に横たわることになる⁽¹¹⁾。

三雄氏、澄夫氏のお二人によると、ニラモにはさまざまな魚の稚魚が集まるという。稚魚はニラモのなかにいるコマセやエビの子などを食べて育ち、その稚魚を追って、大きな魚も入ってきた。

このニラモの環境でおこなわれていた漁には、つぎのようなものが記憶されている。

〈ボラ〉

ボラは汽水を好む魚であり、夏にボラ釣りをした。漁場は岸からノリひびまでの間で、漁法は延縄である。道縄を割りばしの浮子で浮かせ、ひと尋間隔で100本から150本ほどの枝鉤をつける。これにエサのミミズをつけて流す。一度の漁で20匹から30匹ほどのボラがかかった。ボラを売ることはなく、たくさんとれると兄弟などに分けた。ボラは卵の味が良く、煮つけにして食べたという。

〈セイゴ〉

セイゴはスズキの幼魚であり、汽水の環境を好む。夏場に刺網でとる。昔は三雄氏の父親が得意としていて、兄も季節を問わず漁をしていた。三雄氏も自分で食べる分だけはとりに行ったという。

〈アサリ〉

私たちの生活なじみ深いアサリは、沿岸の砂浜や砂泥地に生息し、淡水の混ざる河口などにも多い貝である。青柳では、ニラモの生えた砂のなかや、ニラモのない比較的岸に近い場所にいた。夏に、おもに女性はカチ浜、つまり、歩ける範囲内の干潟でアサリを掘り、男性は腰タブ（腰マキ）、つまり、柄のついた籠で後退しながら海底をかく漁法でアサリをとった。腰タブは沖で水につかった作業となるために体力を必要とするが、その分、漁獲量も多く、一日で一斗缶に30杯ほどのアサリをとることができた。アサリとりをするのは夏の暇な時であり、年に1回か2回程度だったという。

〈ゴーネ〉

ゴーネ（ヘナタリ）は細くとがった円錐形の貝で、汽水域に生息している。ニラモの海岸で潮が引くと、ゴーネが出てくる。それを、網ですくい取る。肥料が不足した戦時中に、それをローラーでつぶして莫藎や蕈のうえで乾燥し、南京袋に入れて水田の肥料として売った。貝殻をつぶすのは、水田にまいた時に足に刺さるのを

防ぐためである。ゴーネを干すときの臭いは強烈だったという。これを買ったのは山側の人たちで、青柳など海辺の人たちはヒラバでとれるキシヤゴ(キサゴ)を代用の肥料に使っていた。戦争以前の肥料はマメイタ(大豆かす)や干鰯であり、戦後は化学肥料に移行した。

また、ゴーネについては興味深い話も聞かれた。青柳の若宮八幡宮では、祭りの際にゴーネをご神体の代わりに神輿に乗せたというのである。本来のご神体は海あがりの「龍の頭のようなもの」だというのが、それを神輿にはのせられないという配慮から、海で拾ったゴーネを半紙で包んで、ご神体の代わりにしたというのである。ゴーネを使うのは、海から引きあげられたご神体にたくさんのゴーネがついていたからである。ゴーネが身近な貝であったことをうかがわせる話である。

〈シロギス・アオギス・クルマエビ〉

砂の堆積が多くて浅い場所には、岸近くであってもニラモが生えにくかった。そうした場所で、脚立を立ててシロギスやアオギスを釣った。これは五井や千葉の人が客を連れてきて釣らせるもので、青柳の人がキスを釣ることはなかった。ただ、こうした環境に集まるクルマエビについては、夜、海をカーバイト・ランプで照らして、パッチンと呼ばれるバネ仕掛けの網で挟み込んでとった。

③ オオモ

オオモ(アマモ)は沈水性の多年草で、葉の幅は1センチメートル、長さは50センチメートルから100センチメートルほどで、さらに成長することも稀ではない。波の静かな内湾の、砂地や泥の海底に群生しており、淡水が混ざる環境を好む。

青柳では、ニラモが岸から500メートルから600メートル沖までを自生域としていたのに対し、オオモはその沖側に生えており、ダンギワまで1キロメートルほどの地点までが自生域だったという。ただし、この範囲の一面にオオモが生えていたわけではなく、比較的深い方、すなわち、今津朝山寄りに多く生えていた。三雄氏と澄夫氏は、今津朝山方面の水深が深いのは、養老川から流れ出た砂が手前で海底に沈むため、今津朝山まで届かないからだと説明する。「海のなかも山あり谷あり」なのだという。

〈マコガレイ・アイナメ〉

4月から11月にかけて、夜、カチで(歩いて)海に入り、桶の底にガラスをはったメガネで水中をみながら、ヤスでマコガレイやアイナメを突いた。これを見突きと呼ぶ。マコガレイは砂のなかにもぐって寝ており、アイナメはオオモに寄りかかって寝ているという。イシガレイはヒラバで突いた。

〈アオリイカ・マダイ〉

地域の境などを示すために海中に立てられた竹の棒を「境棒」と呼ぶ。この境棒にはカラスガイやフジツボ、その他さまざまなムシなどがたくさんつく。それを目当てに集まったアオリイカやマダイを、境棒の周囲に網をまわしてとる。とくに時化の日には多く集まり、3尺のマダイがとれたこともあるという。

〈イシガニ〉

イシガニは内湾や汽水域を好んで生息するカニである。オスは鉋に赤い点がでていることからアカタロウと呼ばれ、爪が大きく味が良い。青柳ではオオモのなかに見られ、潮が引いた時に手づかみで捕獲する。7月20日の若宮八幡宮の祭りでは、大鍋で茹でたイシガニが客にふるまわれる。

本格的に漁師をしている人は、祭りにはイシガニではなくササガニ(ワタリガニ)をとった。夜泳いでいるササガニを、船の上からカンテラで照らしてタモですくう。これは、ヒラバでの漁である。味はササガニが上だった。

祭りではシャコも食べたが、青柳の海は砂地でシャコがとれなかったため、青柳よりも養老川河口寄りの岩崎地区でとれたシャコを売りにきていた。養老川河口の近辺は底質が泥だった。

④ ヒラバ

ヒラバは、ダンギワから手前 800 メートルほどの海域であると推測される。海草は生えておらず、きれいな砂地が広がっていた。ここでとれるのがバカガイやハマグリなどである。

〈バカガイ・ハマグリ〉

バカガイは内湾の潮間帯から水深 20 メートルほどの細かい砂のなかに生息する貝である。一方、ハマグリは砂地の潮間帯先端から水深 10 メートルほどの沿岸部に生息する。

青柳では、ダンギワの手前 500 メートルほどがバカガイの漁場であり、ハマグリの漁場はその岸寄りであった。バカガイは一度大量発生すると 10 年ほどは豊漁が続いたという。ハマグリに関しては稚貝をまいていた。

バカガイやハマグリの漁法はマキであった。焼玉エンジンなどの動力船で五人一組で出かけ、籠を海に投げ込んでそれを巻きとる。ひと月に 2 回から 3 回の割合で漁に出ることができた。ただし、ノリ養殖の作業がはじまると、ハマグリは禁漁となった。

〈ニシカンボ〉

ニシカンボ（アカニシ）は内湾の干潟など、砂泥の浅い海に見られる巻貝である。青柳では、ダンギワ付近、4 尋ほどの深さの所が漁場で、春先の産卵のために集まっているところを籠ですくってとり、小遣い稼ぎをしたという。船の上からホオズキと呼ばれる黄色い卵を見つけると、目印となる長い竹を立てておき、金網の籠でとる。一日に 50 個、多いときには 100 個くらいとれることもあった。

〈キシヤゴ〉

キシヤゴ（キサゴ）は浅い海の砂のなかに生息する巻貝である。青柳ではバカガイやハマグリと同じ海域でとることができる。ゴーネと同様に、戦時中に水田の肥料として使ったが、キシヤゴの方が肉が多く、栄養価が高いため、売らずに自家用としたという。また、ゴーネとは違って丸いため、貝殻をつぶす必要がなく、そのまま水田に撒くことができた。青柳よりも北の八幡から御所地区にかけては、古くからキシヤゴを肥料として使っていたため、その貝殻で水田が真っ白になっていたという。

4. 河川からの水の影響

以上、見てきたように、青柳の海は 2 本の川から流れこむ水の影響を受けている。

まず、青柳の海に直接流れ込むのは前川であり、青柳の海に汽水域をつくり出し、そこを利用する人びとの生活にも大きな影響を与えている。前川から流れこむ淡水の影響で、汽水を好むニラモが繁茂し、そこに生息するエビなどをエサとする魚の稚魚が集まり、さらにそれを目当てとしてボラやセイゴといったより大きな魚も寄ってくる。また、汽水域を好むイシガニやアサリなども多く生息していた。これらの魚介類の採捕は、かならずしも青柳の漁師の中心的な生業ではなかったが、日々のおかずを得る、あるいは、小遣いを稼ぐ上では十分に意義を有するものであった。

さて、もう一本の川は養老川である。養老川は比較的大きな河川だが、その河口は青柳から 2 キロメートル以上離れているため、そこから流れこむ淡水が青柳の海に与える塩分濃度の変化は、前川と比べて小さいと考えられる。⁽¹³⁾しかし、養老川が運ぶ大量の砂は、青柳の洲を形成し、その環境が青柳の漁業を特徴づけているの

である。三雄氏と澄夫氏の説明では、養老川の水と一緒に海に流れ込んだ砂泥が、東京湾の海流によって青柳方面に流れる。その過程で、バカガイやハマグリの子息に適した砂が青柳の海でふるい落とされ、細かな泥はさらに沖に運ばれるという。こうした養老川の影響は、汽水域そのものを青柳の海で形成するものではない。しかし、養老川の水が運んだ砂によって環境を規定されているという意味では、この環境を河川の水と切り離して考えることはできないだろう。

さらに、もう一点重要なのは、青柳が質の良いバカガイを多く産する理由について、三雄氏が、養老川の淡水の影響をあげているということである。養老川から流れこむ淡水が、バカガイを育てるのだという。バカガイが塩分濃度の高い海水を好むとする説も見られるなかで [雨宮他 1933 : 458]、三雄氏の説明をどう理解したらよいか判断が難しいが、淡水に含まれる栄養分の問題としてとらえることはできるかもしれない。栄養価の高い淡水が、バカガイのエサとなるプランクトンを育むのである。

こうした、淡水と貝類の生育の関連性については、興味深い事例をひとつ示しておきたい。「千葉県今井漁業組合（千葉市）の地先では稚貝の発生が年々少なくなり、他の地方からこれを購入していた。このため三〇年三月から五月にかけて漁場の改良をはかるため、海面に淡水誘導設備を施した。具体的には三〇間（約五四メートル）の深さの掘抜き井戸を海岸に掘って地下水を湧き出させ、また今井川の流水や海岸の各井戸の湧き水を誘導するため、長さ七〇〇間・幅四間・深さ一尺（約三〇センチ）の水路を二筋掘削して淡水と海水の調節をはかった」 [千葉県史料研究財団 2006 : 662] というのである。つまり、青柳からほど近い千葉市の沿岸では、アサリやハマグリの子貝の発生をうながすために、海のなかに井戸を掘り、また、水路を設置して淡水をひき、わざわざ塩分濃度の低い環境、つまり汽水域を作っていたのである。

実は、青柳の海中にも井戸が作られていたという。その用途は詳らかでないが、千葉市の例と同様に、貝の生育を助けるために掘られた井戸であったとも考えられる。もし、そうであるならば、養老川の淡水がバカガイを育てるという三雄氏の説明は、説得力をもつことになる。

貝類の生態と淡水との関係については、生物学的な検討を必要とする。素人の判断で安易な結論を出すことはできないが、仮に養老川の淡水そのものが青柳のバカガイやハマグリの子貝の生育に影響を与えていたとすれば、青柳の洲全体を汽水域ととらえることもできるかもしれない。

おわりに

以上、千葉縣市原市青柳の、昭和 36 年の漁業権放棄以前の漁の様子をもとに、青柳の海と淡水との関係を整理し、海の側の漁を汽水文化としてとらえる可能性を提示した。ただし、小稿であつかった内容は潮汐や海流、地質、海洋生物等の多様な分野を含んでおり、筆者の能力を大幅にこえるものであった。したがって、事実の誤認や重要な研究成果の取りこぼしなどが危惧される。今後は、各分野の専門家からのご指導を仰ぎながら研究を進めることを課題としたい。

【附記】

小稿の執筆にあたっては、小倉三雄氏と小倉澄夫氏のお二人に貴重なお時間を割いていただいた。また、お二人をご紹介いただいた千葉県立中央博物館の島立理子氏には、聞き取りの場にもご同席いただき、東京湾沿岸の漁業についてご助言をいただいた。さらに、千葉県立中央博物館の黒住耐二氏には東京湾の海洋環境についてご教示いただき、千葉県立中央博物館分館海の博物館の菊地則雄氏には、東京湾に生息する海草について

てご教示いただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

【注】

- (1) 汽水域は、河川から供給される淡水が海水と交わることで形成される。その交わり方には、河川が直接海に注ぎこむものと、河口付近に発達した洲などの堆積物によってせきとめられた淡水が、狭い水道から流入する海水と交わるものがある。後者は汽水湖と呼ばれるものであるが、小稿では前者に絞って論を進めたい。
- (2) 河川から流入する水の影響は、河口周辺部よりもかなり沖にまでおよんでいるという〔加納・横尾 2011：27〕。
- (3) たとえば、潮流を利用した袋待網漁業の一種である有明海のアンコウ網漁では、汽水域を好む多くの魚介が漁獲される。佐賀県小城市と白石町の間を流れる六角川の河口から1キロメートルほど沖合で2016年6月におこなわれたアンコウ網漁では、下げ潮にのったスズキ、アカエイ、エツ、ムツゴロウ、ワラスボ、シバエビなど、汽水域を好む、あるいは河川感潮域で見かけられる魚介類が漁獲されていた。これらの魚介類が、河口のすぐ沖で、袋待網漁業であるアンコウ網漁によって漁獲されたということは、これらの魚介が、上げ潮に乗って河川感潮域に侵入していたことを意味しており、さらには、潮汐の影響で海側とを行き来していることの証左となる。
- (4) ノリ養殖に関しては、古くから淡水の影響が指摘されている。たとえば、明治16年(1883)の『海苔培養法』では、「地味」すなわちノリ養殖場の環境について次のように述べている。「海苔培養ハ地味ノ撰定ヲ以テ第一トス。抑モ海苔ハ鹹淡水ノ交和二因テ生ズルモノナルガ故ニ、須ラク鹹淡能ク交通スルノ地位ヲ撰ビ、雨水ノ最モ稀少ナル時ト雖トモ、鹹淡水ノ配分其適度ヲ誤ラザラシムルヲ以テ肝要トス」〔高木 1883：238〕。
- (5) 聞き取り調査は2017年10月31日に千葉県立中央博物館で、11月15日に青柳の小倉澄夫氏宅でおこなわれた。
- (6) 一番潮が引く時で、干潟が出現するのは岸側から2番目のノリ養殖の柵まで、という話にもとづいている。
- (7) 東京湾の中央部に広がる、水深10メートルから40メートルの平坦な海底を平場と呼ぶことを紹介したが、三雄氏や澄夫氏は海草の生えていない洲の砂地を「平場」と呼んでいた。そこで、ここでは後者を片仮名で「ヒラバ」と表記することで、混乱を避けたい。
- (8) 河口の内側となるカゴンズは、河川内の水域ではあるが、青柳の汽水域を構成する重要な要素であるため、参考までに取りあげた。
- (9) ここで紹介する魚は、あくまでも三雄氏や澄夫氏の記憶に残るものであり、青柳でおこなわれていた漁を網羅するものではない。また、すべての魚を三雄氏が経験したということでもない。
- (10) カゴンズの鼻は埋め立て工事の際に爆破によって取り除かれたというが、その後も堆積は続き、現在、干潮時にはその一部が水面に姿をあらわす。
- (11) 三雄氏は若いころに狩猟もしていた。夜、潮が引いて干潟にあらわれたニラモの根をカモが食べにくる。そのカモを鉄砲で撃っていたという。こうした、ニラモを介した猟のやり方もまた、青柳の海の汽水性と関連するものといえよう。
- (12) 青柳でもマイワシをとる家が2、3軒あった。マイワシがとれるとほら貝を吹いて人を集め、網から魚を外す作業を手伝ってもらったという。手伝った人はサイ(菜)をもらって帰った。マイワシは一斗缶に入れて近隣の人びとに売ったほか、カゴンズの鼻で干して肥料とした。
- (13) ただし皆無ではない。たとえば、ノリ養殖では、養老川に近い位置の方が、アオノリが混入しやすいという。この現象は、養老川の淡水の影響だと考えられている。アオノリの混ざった海苔は「べっ甲青」と呼ばれ、寿司用の海苔として高値で取引された。

【参考文献】

- 雨宮育作他 1933 『水産動植物図説 有用・有害・鑑賞』大地書院
- 大嶋剛・風呂田利夫 1980 「小櫃川河口干潟周辺における底生動物の分布」(『千葉県木更津市小櫃川河口干潟の生態学的研究 I』東邦大学理学部海洋生物学研究室・千葉県生物学会 pp.45-68)
- 大竹久夫 1982 「汽水域の生態学」(島根大学地域分析研究会『飢餓の入海―中海とその干拓淡水化をめぐる』たたら書房 pp.87-94)
- 貝塚爽平編 1993 『東京湾の地形・地質と水』築地書館
- 川瀬久美子 2014 「干潟はどこで育まれるか―干潟の地形の多様性の整理と検討」(山下博由宇・李善愛編『干潟の自然と文化』東海大学出版部 pp.1-17)

- 加納光樹・横尾俊博編、河野博監修 2011 『東京湾の魚類』平凡社
- 高木正年 1883 (1993) 『海苔培養法』(『日本農業全書 45 特産 1』農山漁村文化協会 pp.231-276)
- 千葉県史料研究財団 2006 『千葉県の歴史 通史編 近現代 2』千葉県
- 千葉県教育委員会 1967 『東京湾漁撈習俗調査報告書 東京湾の漁撈と人生』
- 房総の漁撈民俗調査団 1983 『房総の漁撈民俗調査報告書 内房における漁具・漁法とその習俗』千葉県教育委員会・千葉県立安房博物館
- 松田睦彦 2014 「汽水湖沿岸の漁撈と生活研究のための覚書」(『年報非文字資料研究』10 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター pp.133-139)
- 望月賢二 1997 『図説 魚と貝の大事典』柏書房
- 山下博由 2014 「貝類の生息地としての干潟環境」(山下博由宇・李善愛編『干潟の自然と文化』東海大学出版部 pp.19-48)